美作を得たから、雖治の北加賀を棄てたことと思はれ、之と同時に越前の朝倉敏景は東軍に歸し、その報償として同二年守護職に任ぜられたので、政親も敏景の周旋により赤松領の加賀半國を回復することになつたらしい。政親が朝倉氏に憑りて將軍足利義政に謁し、その結果富樫介になつたことは、越登賀三州志にも言ふ所である。

(二)政親と本願寺門徒―政親が朝倉氏と結托したに對し、南加賀を領した富樫泰高は本願寺門徒と提携した。是を以て文明五年七月門徒は當時政親の居た山内を攻め、敏景の之を將軍に訴へたことは親元日記に見える。しかも翌六年になつて、政親の弟幸千代が專修寺派の土民に擁護せられて所領を奪はうとすると、本願寺門徒は白山衆徒と共に政親に黨し、遂に幸千代側を破つた。かくて政親は野ノ市に歸ることを得て勢稍張るや、その臣槻橋某の獻策を納れ、忽ち黜つて本願寺門徒壓迫の體度に出で、若干の有力者は越中に亡命するの止むを得ざるに至つた。この後幾ばくならずして彼等は政親に請ひ、舊里に還住すべき諒解を得たから、河合藤左衛門を使者として吉崎の蓮如に報告し、且つその指揮を仰がしめたに、蓮崇は之を蓮如に通じなかつたのみならず、恣に蓮如の命を矯めて、門徒の極力政親に抵抗せんことを勸め、和議遂に成らなかつた。然るに七年八月蓮如は吉崎より去り、蓮崇亦幾多の舊惡露見して勘當せられたので、門徒は先に與へられた指令に拘泥せずして、政親との妥協を講じ、越中の亡命者をも歸住せしめ、爾後連りに勢力を加へて國中の諸莊園を沒倒するに至つた。

(三)政親の戰鬪準備―長享元年九月將軍足利義尙、六角高頼を討たんが爲近江に出陣した。この陣中で政親は義尙に對し、その分國の土民が念佛に耽り一匿の資物をも納めぬから、越前・越中に御教書を下して援兵を派せしめ、力を合はせて之を平定せんことを請ひ、遂にその許可を得て十二月國に就き、高尾城を修めて之に據つた。蓋し野ノ市の居館が土地平坦で防守に不便なからである。門徒の一揆等乃ち大に恐れ、憐を政親の老臣山川三河守に求め、三河守は之を容れて土民を虐遇するの君德に非ざる所以を述べて諫めたが、政親は聽かなかつた。是を以て一揆は忽ち反噬の勢を現し、洲崎泉入道慶覺・河合藤左衛門宣久を將として、石川郡久安に新壘を構へ、高尾城の哨兵と僅かに二十餘町を距て、相持して翌二年五月に及んだ。この際越前・越中の援兵が將軍の命を奉じて將に來らんとする風聞があつたから、一揆は河北の勢を倶利伽羅・笠野・松根に配置し、江沼の兵を敷地・福田に屯せしめた。之に對して政親は急使を近江にある將軍義尙に派して情を報じ、而して將軍は越前の朝倉貞景に援軍を出さしめん爲使者を命じた。

(四)政親の滅亡―一揆側では五月廿六日夙くも高尾城攻擊の部署を定め、富樫泰高を總帥として本陣を野ノ市の大乘寺に置き、又鳥越の弘願寺・吉藤の專光寺・磯部の勝願寺・木越の光德寺等大坊主は、遠く伏見・山崎・淺野・大衆免に、洲崎泉入道慶覺・同十郎左衛門久吉・河合藤左衛門宣久は上久安に、笠間兵衛家次は野ノ市の馬市に、安吉源左衛門家長は河原衆と共に額に、山本圓正入道は山科の山王林に、能美郡の諸勢は野ノ市の諏訪森に陣を張つた。白山の衆徒は初め政親に與力する形勢であつたが、一揆の猛威に抗すべからざるを知り、神社の安穩を計るを理由として、劍の衆徒と共に諏訪口に陣し、一揆に合流することになつた。戰鬪は六月五日に始り、言戰矢戰を行うた。六日には一揆大乘寺に集つて軍議を凝らしたが、此の日倶伽羅口から侵入した越中軍を、英田の光濟寺等が擊退した報を得た。七日早天富樫勢は城を出て額口を衝いたが、豫めこの事あるを知つた洲崎・河合に破られて勢忽ち屈した。政親乃ち死を決し、八日書を裁して攻圍軍の勝願寺・光德寺に遣はし、童幼婦女を逃れしめんことを託し、その快諾を得て之を城から出した。此の日一揆は昨日の戰勞を慰する爲に休息したのである。九日山川三河守は出で戰うたが、敵は之を捕へて祇陀寺に幽し、後越前に脫走せしめた。政親も亦奮鬪したが、衆寡敵する能はずして城に入り、殘兵と共に靈く自刄した。時に享年三十四。攻圍軍遺骸を大乘寺に葬つた。法名は大明寺と傳へる。是より先將軍義尙は、六月一日南禪寺の叔和西堂を江州の陣に惹き、朝倉貞景に救援の使者を命じたから、五日叔和西堂は越前府中に達したが、朝倉軍の既に出發した後であつた。八日朝倉軍國境を超えて加賀の橋に入つたが、江沼郡の一揆等願生の指揮に屬して、之を金津の上野に擊退し、高尾城の陷落した九日の夕捷を本營に報じた。是に至つて加賀一國は泰高と一向一揆との左右する所となつた。

(五)政親と專修寺門徒―舊說に政親と本願寺門徒との衝突原因を、泰高が御幸塚に在つた時、蓮如を迎へて留錫せしめ、且つ吉崎道場の施主となつて金品を喜捨したので、門徒は之を援け、政親が專修寺と所緣あるを憎んで倒したのであるとするものがある。泰高のことの眞僞は明らかでないが、政親と專修寺との間には何等かの姻戚關係があつたらしい。併し本願寺門徒の政親に反抗したのはその爲ではなく、高尾城陷落の際にも專修寺派の僧らしいものは一人も居なかつた。政親が將軍の後援によつて本願寺門徒を壓迫せんとしたので、その自滅を免れん爲、政親を共同の敵とする泰高を戴いて、この體度に出なければならなかつたまでゞあらう。

(六)白山衆徒の行動―文明六年富樫政親が弟幸千代と國を爭うた時に、專修寺派は幸千代に黨し、白山衆徒と本願寺派とは政親に味方した。しかも戰勝の結果、獨本願寺門徒の跋扈跳梁を來し、白山本宮の所領であつた諸免田は、概ねその掠奪する所となつた。しかも長享二年本願寺門徒の政親と戰ふや、白山衆徒は本願寺門徒に黨して政親を討つた。白山衆徒は最早事大を主義として自家の安全を謀らざるべからざるに至つたのである。是を以て假令戰勝を得たりともその餘慶に浴することができず、遂に土豪輩をして白山本宮を輕蔑せしめることになつた。延德三年石川郡の結城宗弘が白山本宮に闖入した如きもその例である。

トガシミツイヘ　富樫滿家　氏春の子。英田小次郎と稱した。舊說に、兄昌家多病なるを以て代つて國政を執つたが、强勇絕倫、元中八年(明德二)山名氏清に黨して、大内義弘と京都内野に戰ひ、十二月晦日廿九歲で陣亡